

# 直方ミニバスケットボールクラブだより

スポーツを通して「学び—気づき—変える」



3月以降コロナ禍で、これまでの生活に規制がかかり、常に「三密」「ソーシャルディスタンス」など気にしながらで、なかなかおもいきって遊んだり動いたりできず、ストレスを抱えながらの生活が続いています。それに追いついていくように6月～7月には豪雨災害に見まわれ、8月になると猛暑、酷暑の毎日。常にいくつものことを気かけながらの活動で、アクセルをふみかけてはブレーキ、ブレーキをふみかけてはちょっとアクセル、という感じで、なかなかおもいきってトップスピードにあげられないのがもどかしいですね。まあそれでも、まったく活動停止になった約4か月間のことを思えば、まがりなりにも活動ができていることを喜ばなければならないのでしょうか。心身の健康を保つために、さまざまなことに留意し、バランスをとりながら活動をコントロールしていきます。

スポーツ選手にとっても社会的な問題や医学・医療分野と無関係ではないことが、よくわかりますね。近代スポーツにおいては、やみくもにトレーニングを積むことに問題があることは明らかにされており、科学的なトレーニングが重要視されるようになっていきます。そのためには、指導者はもちろんですが、選手自身も科学的なこと、医学的なことに興味をもち、学びを深めていくことが求められています。自分を知るために必要なことです。こうした関心の寄せ方、考え方の習慣は、子どものときから少しずつ身につけていくことが重要です。

スポーツを通してさまざまな学びを

スポーツとはいえ、理解力、思考力、判断力、行動力を磨くことが重要です。酷暑のなか長時間、体を動かすことを避けるということもあり、活動の途中途中で短時間ですが、あえて学びの時間をとるようにしています。ここ最近でいうと、次のような内容です。

- ・ 異常気象と自分の健康管理...熱が出ること、汗をかくこと、水分補給や塩分の必要性と体のしくみ (理科)
- ・ 筋力と関節の関係...冬の体ほぐしと夏の体ほぐし (理科、保健体育)
- ・ 雨天時と晴天時の湿度とフロア面の関係...ストップがよくきく、すべりやすいなど (理科)
- ・ 暑い季節と寒い季節の気温とボールの空気圧の関係...冬場はボールがはねにくくなる (理科)
- ・ バスケット用語にはたくさんの外来語 (英語) が使われていること...「オフィシャル」「タイマー」「スコア」「ボード」「リング」「オフense」「ディフェンス」「ライン」「コート」「フロント」「バック」「サイド」「エンド」「エア」「フロア」等 (国語・英語)
- ・ 外来語の日本語訳...「ソーシャルディスタンス」というより「フィジカルディスタンス」を、ということ (国語・英語)

もちろん、小学生の子どもたちにわかる程度のものにして学習しています。その内容は、小学校の教科学習の中にも含まれているものです。教室で学ぶことと自分が好きでしているバスケットでのことが結びつくと、子どもは学習に興味・関心が高まり、理解もしやすくなってきます。教室で学んでいることをバスケットに生かし、バスケットで学んでいることを教室で生かそうと話しています。

「ソーシャルディスタンス」という表現への違和感

5点目のことばの問題は、先週学習した内容です。「コロナ問題」が「差別問題」と化してしまうこ

とがあることは以前にも書いた通りです。実は「ソーシャルディスタンス」ということばにも、その要素があることがわかってきて、もっと別な表現にすべきではないかということが、国内外で言われはじめています。もちろん日本国内では、外来語を使用しなくても「距離をとって」とか「距離を離して」などで十分なのですが...

距離をとるのを「社会的」としてしまうと「心身ともに」というニュアンスで伝わってしまう。しかし大事なことは、身体の距離はとっても心の距離は離さないこと。このニュアンスに合わせるなら、「ソーシャル・ディスタンス」ではなく「フィジカル・ディスタンス」とした方がより適切なのではないか、ということです。「フィジカル」は文字通り「身体」ですから、「体の距離をとりましょう」ということです。このほかにも「セーフティ・ディスタンス」「キープ・ディスタンス」など、「適切な距離を保つ」「人との距離を確保する」などの表現が使われるようになってきています。

#### 「ソーシャルディスタンス」ということばの歴史的な使われ方の問題

そもそもこの用語は、インドにおけるカースト（差別）制度のもと「穢れから距離をとる」、また「被差別民とされた人たちから距離をとる」というルールとして使用されたことば、という歴史的経緯があるそうです。このルールを破った場合は、「肉体的に処罰され。社会的に拒否されてきた」ということです。それによって、被差別民とされた人たちへの「排除、差別、屈辱、剥奪」を当然とする生活規範を維持させてきた背景があるとのこと。インドでこの問題に取り組んでいる人たちからの指摘をうけて、世界保健機構（WHO）は、言い方を「フィジカル・ディスタンス」に改めています。日本国内においても同様の動きが出はじめています。教育現場にも、改善を求める通達が出されているようです。

この一連のことには、多くの学びの視点があります。

- \* 「知らない」ことによって、誰かを傷つけていることがあるということ。
- \* 情報だけを鵜呑みにすることの危うさ。
- \* 当事者や関係者の声に耳を傾けることの大切さ。
- \* 学ぶことによって気づきが生まれ、行動をかえることができるということ。
- \* ことば（表現）を大切にすることの意味。

.....

スポーツ界もグローバルな世界です。バスケットはもちろん、サッカー、バレー、ラグビー、野球など。日本選手も海外のチームに移籍して実力を高める時代です。当然、さまざまなことが世界基準で求められます。特に「人権認識」についてはきびしく問われます。バスケットを通して、子どもたちと、「人権」をはじめ、さまざまことを学んでいきます。

